

ロマンスがお待ちかね

Fuzuki & Tsukasa

清水春乃

Haruno Shimizu

termity



エタニティ文庫

目 次

ロマンスがお待ちかね 5

困ってます!?

319

書き下ろし番外編

You drive me crazy 339

ロマンスがお待ちかね

プロローグ

——たぶんきつと、そうなのだ。
 持てる運を全て使い果たしてしまつたのだ。

若干上向きになつたとはいへ、まだまだ厳しい就職事情の中、大手商社である桜井コーポレーションに入社できたとか。

しかも、数いる新人社員のうち、ほんの数名しか選ばれない本社の配属になつてしまつたとか。

もちろん、それなりの努力はしてきたから、単なる運だとは思わない。

——だけど。

神様が**大盤振る舞い**をした幸運のツケを、今、私は払っている。

「明日までにやっておいて」

例によってぞんざいに投げられた仕事は、桜井コーポレーション営業部、新入社員で

ある**佐久間文月**にもどうにかこなせる程度の内容ではあつた。が、些**かさ**量が多すぎた。

そういうわけで、ようやく仕上がったのは終業時刻をかなり回つた頃であり、そしてまた、こういうシチュエーションは最近では珍しいことではない。

でも取り敢えず、今日はこれで終わりだ。文月はパソコンからデータを送り、プリンターに向かう。ところが資料を数枚吐き出した後、プリンターは鈍い音とともにシステムエラーを表示した。

「紙詰まりい？ 何で今、こんなしょっぱいエラーを出すかな」

カートリッジ切れじゃなかっただけ、よかつたと思さうべき？

ため息を吐いてプリンターを覗き込み、文月は奥に詰まつた紙を引っ張り出した。

「文句があるなら、紙詰まらせてないで、全て吐き出してしまえ」

私の送つたデータごととなっ！と、プリンターに向かって毒づいてみる。

「あれ。また残つてるの？」

そのとき、背後から声を掛けられて、ぴくりと肩が跳ねた。

——はい、残ってますとも、ご覧の通り。

とは、口に出さないけれど。さっきのよりも、もうちょっと小さくて、だけど重いため息が漏れた。

何でこういうときに限って、この男性**ひと**に見つかつてしまうかな。

企画部営業企画課所属の常盤司主任は、透明感のある端整な顔立ちと、すらりとした長身で、女子社員に絶大な人気を誇る人物だ。しかも、二十九歳という若手ながら数々の企画を成功へと導いているやり手である。とはいえ、キラキラした野心を露わにするのではなく、どちらかといえば、飄々と涼しい顔で結果を出していくタイプだ。

フロアにはまだ、精力的に仕事をこなす人の姿がちらほらと残っているし、その中の誰かに用事があって、営業部まで出向いてきたのだらうけれど。

「あと少しで終わります」

どうぞお構いなく。文月の背中では、明らかにそういったメッセージを発しているはずなのだが、常盤はまるで無頓着に、ふらりと隣にやってくる。

そして、プリンターのカバーを元に戻しリセットボタンを押す文月に、おっとりとした口調で、だけどひどく冷たいセリフを口にした。

「あのさあ。ただ頑張ればいいってもんじゃないでしょ？」

張り詰めていた心が、午後九時のオフィスで、ぱちん、と弾ける。

がむしやらに頑張るよりほかに、今の私に何ができるというの？

——泣くな。

泣くな、泣くな、泣くな、私。

こんなところで、容易く弱みを見せるな。

少し俯き加減で唇を噛む文月の前で、再びプリンターが資料を吐き出し始めた。

この男性の、いつも一歩引いたところから眺めているような雰囲気は苦手。

そのくせ、何もかも見透かしているかのような眼差しが苦手。

それでどうするの？ と突き放したように浮かべる薄い笑みが苦手。

——ところが。

「もう少し、狡くなるうか」

くしゃりと頭を撫でられて、文月は驚いて視線を上げた。

常盤は少し首を傾げ、どこか捉えどころのない表情を浮かべて文月を見下ろしている。

「な、ななななっ」

何なのーっ!? 両手で頭を押さえて、思わず飛び退る。

「そんなに警戒されるなんて、ちょっと心外」

彼は、くすっと笑うと、「じゃあ、早く帰りなよ」と言い残してフロアの奥へと足を向けた。

文月は暫く固まったまま、その後ろ姿を見送っていたが、はっと我に返ってプリントアウトされた資料を掴んだ。

言われなくても早く帰りますってば。苦手意識のある常盤と帰りのエレベーターで鉢合わせとか、絶対無理。

大急ぎで後片付けをして、デスクの引き出しに資料を突っ込むと、「お先に失礼します」と誰にもなく声を掛ける。「おう、気を付けて帰れよ」の声に送られて、オフィスから逃げ出し、そのままの勢いで駅に向かった。

仕事なのか飲んだ後なのか、帰宅するサラリーマンで混雑するホームで、文月は先ほどくしゃりと撫でられた頭に触れてみた。到着した電車の風圧で、ショートボブの柔らかなクセ毛が指の間をふわふわと通り抜けていく。

「――変なの」

背後から押されるように車内に乗り込みながら、思わずそう呟いた。

今までだって似たような時間に顔を合わせるがあったけど、常盤が浮かべていたのは、大抵面白がるような表情で――まあ、頑張ってる、くらいなもの。それなのに、何だかって今日はこんな風に踏み込んできたのだろう。

「狭くって何？」

あの表情も、そのセリフも、全くもって謎な男性だ。

そして、やっぱり苦手だ――

1 だつて頑張ってるもん

「本当はウチの営業が、日中のこんな時間に社内にいちゃいけないのよ」

文月は、大きな目を縁取る完全自前の睫毛を伏せた。ふっくりした頬と小ぢんまりした口許。二十三歳にしては幼く見られがちな容貌が、営業を名乗るには不利な場合もある。だが、一五二センチの小柄な身体に宿るのは、不屈の闘志だ。少し前までは、自分でもそう信じていたのだけれど――。若鶏の照り焼きを箸でつつきながら、文月は眉間に皺を寄せた。

「じゃあ、何でここににいるのかしら？」

向かいに座った、同期で総務部所属の栗原綾乃が、鮭のムニエルを頬張りながら首を傾げた。さらりとセミロングの黒髪が肩先で揺れる。ノンフレームの眼鏡の向こうから文月に理知的な眼差しが向けられた。

社員食堂はかなり混み合っているが、ほとんど内勤組である。

「わかつているくせに」

文月は、鶏肉にがぶりと齧りついた。

「あんたが鈍臭くて、また逃げ損ねたってこと？」

「鈍臭くとか言うな」

「営業でもっと〱機を見るに敏〱って感じじゃないといけないんじゃない？」

綾乃が皮肉っぽく口角を片方上げて、クールに突っ込む。

「そこは優しく、〱頑張れ文月〱って言ってあげるところかな」

突然背後から割り込んできた声に、文月はうぐつと喉を詰まらせた。

「ああ、ごめんごめん」と詫びつつも、その声の主は全く悪びれた様子もなく、ごく自然に文月の背中をとんとんと叩く。綾乃が差し出してくれた水を慌てて流し込み、文月は涙目のまま首を巡らせた。

「足止めをくらっちゃった？」

そう言って首を傾げているのは、食べ終わったトレーを抱えた常盤だ。昨日のセリフといい、この男性は文月の事情をどれくらい知っているのだろう。

「ええ、まあ」

曖昧に頷きながら、文月は顔を強張らせた。

経験もノウハウもない営業の新人は、自分なりのやり方を見つけ出すまで、足で稼ぐしかない。それなのに、文月がしていることといえば――

文月の表情をじっと見つめ、常盤は言った。

「何てことないって顔、してようか」

「はいっ？」

「この二か月、そうやって貫いてきたんでしょ？ だったら、今更ここでへたらない。

今までと同じように、何てことないって風に振る舞おうか」

常盤は薄らと笑みを浮かべて言葉を重ねる。

「皆、そんなに無関心じゃないし、馬鹿でもないよ。何が起きているかくらい、ちゃんとわかってる」

文月は目を瞬かせた。

「当たり前でしょ？ 新入社員が放置されていたり、連日遅くまで残業しているんだよ。しかも、仕事量をコントロールしているはずの指導係の姿はそこにない」

そうでしょ？ というように、常盤は首を傾げる。

「ベクトルは間違っている気がするけど、まあ、せっかくここまで意地を張ったんだし、最後まで頑張ってその意地を通してごらん」

言いたいことを言ってしまうと、常盤はまたふいっと離れていった。

その後ろ姿を見送りながら、綾乃が皮肉っぽく口にする。

「ベクトル、どっち向いてるって？」

「……さあ。何か間違った方向？」

相変わらず、よくわからない男性だ。

「ところであなた、いつの間に常盤さんと親しくなったの？」

「親しくなんかなってないし」

「ほおう？　というように、綾乃が片眉を跳ね上げた。ランチプレートを睨みつけながら、文月は唸る。

「ベクトルとか、頑張って意地を通せ」とか、ただ頑張ればいいってもんじゃないとか、よくわからないよ」

「何の話？」

「……そうよ、私、頑張ってるもん。だって、頑張るしかないじゃないの」

「は？」

「それなのに、ただ頑張ればいいってもんじゃないって、じゃあ、どうすればいいってのよ。もっと狭くって意味不明だしっ」

文月は、ゲサツと鶏肉に箸を突き刺した。

「……あなたの話がそもそも意味不明」

肩を竦める綾乃に、文月はゆっくりと視線を合わせた。

「昨夜、常盤さんに言われたの」

綾乃が、呆れたような表情を浮かべる。

「何でまたあなたは、ああいう面倒くさそうな人を引つ掛けちゃうのかしらね。野崎女史といい常盤さんといい」

「どっちも私が引つ掛けたわけじゃないし——って、常盤さんも面倒くさい人カテナの？」

文月が首を傾げると、綾乃が学校の先生よろしく、ぴ、と指を差す。

「はい文月くん、企画部営業企画課常盤主任について述べてみよ」

うーん、と文月は眉間に皺を寄せる。

緩やかにウエーブした色素の薄い髪。アーモンド型の目にすつと通った鼻筋。薄らと弧を描く唇。背も高いし、モテル男性社員筆頭ではあるけれど。

「見た目も語りも態度もソフトな印象ながら、その実かなりシビアなやり手と言われている、かな」

個人的には、あの掴みどころのない雰囲気は苦手。

「つまりだな。周囲に与えている印象と実際の在りように隔たりあり、ということよ。これ即ち、胡散くさいと言わずして何と言っ」

「面倒くさい通り越して胡散くさいって」

「腹に一物あるタイプってことね」

あは、と引き攣った笑い声を上げながら、文月は思う。

常盤についてはともかく、問題は女史だ——
何故文月がひとり、日中社内に足止めされていたり、度々遅くまで残業しているかといえは。

それはひとえに、指導係でもある先輩社員、女史こと野崎有香（ゆづか）から回される雑務のためにも他ならない。

今日にしてもそうだ。

「佐久間さん、外回り？」

朝、慌ただしく営業用の資料を鞆に詰め込む文月に、野崎が声を掛けてきた。

「はい」

「アポは入っているの？」

野崎は壁に掛かっている、各課営業部員の名前が入ったスケジュールボードに目をやりながら、文月に尋ねる。

「飛び込みです。交渉先を少しでも増やしておきたいと——」

「じゃあ」

ばさり、とクリップで留められた資料が文月のデスクに投げ出された。

「これ、午後私が帰社するまでにプレゼン用にまとめておいて」

「っでも」

「資料をプレゼン用に見映えよく作り上げるのも、大事なスキルよ。帰ったらチェックしてあげるから」

そう、例えばデータの入力。あるいは資料の作成。もしくは情報の収集。共通業務のこともあるが、今日のように野崎の個人業務がさらりと渡されることも少なくない。それらは決して難しくないが、物理的に手間の掛かるものばかりだ。

まだ慣れないから手際よくこなすことができない、ということも確かにある。しかし、それを指示されるのがいつも締切の間際であったり、文月の他の仕事と重なるタイムミングであったり、そこに某かの意図（いどう）が存在することを感ずしてしまう。

——某かの意図。

あまりにもあからさま過ぎて、気付かないふりなどできない。

* * *

文月が営業三課に配属された初日、指導担当であるチューターとして紹介された野崎は、モデルのようにすらりとした身体をダークグレーのスーツに包んだ、いかにもやり手の営業といった風情（ふうせい）だった。彼女は、華やかに巻かれた髪をサラリと肩から払い、文月に向かって皮肉っぽくこう尋ねたのだ。

「本社に何か伝手があったの？ 私は地方で何年も必死に頑張って、ようやく本社の席を掴んだのよ」

尤もそのとき、文月はその言葉に含まれるものをきちんと理解してはおらず、にっこり笑ってこう返したのだ。

「せっかく頂いたチャンスなので、頑張ります」

二週間ほどだろうか、野崎はおびなりに文月を営業活動に同行させた。

桜井コーポレーションは、食品、日用品を主に取り扱う大手の商社である。この会社における営業の仕事は、平たく言えば、何か売れそうなものを見つけ、それを取り扱ってくれそうなどころを見つける、といったものだ。しかし野崎は、何故その企業のその商品に目を付けたのかといった具体的な話や、どうやってアプローチし契約に結び付けるのかといった、肝心な手の内を明かすことはなかった。新入社員を一人前の営業に育てようという意志はそこになく、ただ仕方なく連れ歩くだけ——そんな気配を隠しもしなかった。そしてある日、一通りのプロセスを見せ終わったとでもいうように、あっさりこう言つてのけたのだ。

「もうひとりで大丈夫よね？」

もちろん、大丈夫なはずなどなかった。とはいえ、それまでの素っ気ない態度からして、野崎に何かを期待するのは無駄だと理解していた文月は、素直に頷いた。

「頑張ります」

野崎が教えてくれないのならば、他の誰かに教えるを乞えはいいだけのことではないか？

この程度の扱いで、途方に暮れるような文月ではない。ともすれば幼くも見える外見から誤解を受けやすいが、熱意ならば誰にも負けないのである。ひとり颯爽と出掛ける野崎を見送つてから、文月は上司である都築課長のもとへ向かった。

「色々な方のノウハウを学びたいので、野崎さん以外の方に同行させていただいてもよろしいでしょうか」

それから暫くは、何人かの先輩営業マンに同行し、彼らの営業ノウハウを間近に見る機会に恵まれた。そして、『営業スタイル』には定型があるわけではなく、個々人が模索しながら己のスタイルを確立していくものなのだ、と実感する。

しかし、これもまたある日突然、野崎からのひとことで中断を余儀なくされた。

「私があるを蔑ろにしているかのような行動をとらないでくれる？」

「蔑ろ、ですか？」

「指導係の私が、まるであなたを放置しているみたいじゃない」

いや、まんま、その通りなのでは？ という表情が、迂闊にも文月の顔に過つた——
かもしれない。

野崎は吐き捨てるようにこう付け加えた。

「男を漁りに来てるんじゃないんだから」

……確かに、同行をしていたのは男性営業であるけれど。

「媚びてるんじゃないわよ」

学生時代から今に至るまで、文月はこれほど露骨な害意に直接晒されたことがなかった。それ故、真つ直ぐにそれと向かい合うことしかできなかった。媚びている、と言われてまで、誰かに頼るわけにはいかない。

翌日から、文月は本当の意味で営業としてひとり立ちした。これがひと月ほど前の状況だ。

根拠のない悪意に負けたくない。だから文月は、がむしゃらに、胸を張って、顎を上げて、前を向く。

そして——何のテクニクもない、そんな熱意が通じることもある。

思いがけず、契約をひとつ取り付けたのが、二週間前のこと。

「よくやった!」

課長や、営業先に同行させてくれた先輩社員たちは、小柄な文月の頭をぼんぼんと叩き、ふわふわな髪をくしゃくしゃにして褒めてくれた。だが、野崎との関係が更にこじれてしまったのは、文月が掴んだこのビギナーズラックのせいである。日々の営業活動

に差し支えるほど、文月に回される雑務は増やされた。文月にできるのは、野崎との直接の接触を減らして、雑務の回ってくるタイミングをずらすことぐらいだ。日中、外回りに使う時間を拘束されることは避けたい。たとえ昨夜のように、遅くまで残業することになったとしても。

——そう、文月は頑張っている。どうか、この状況を抜け出そうともがいている。今日のように、上手くいかないことがあったとしても。そして、同期の友人も、今日に至っては常盤までも、頑張れと言う。

でも——

頑張っても頑張っても、その先に立ち塞がる野崎に、少し心が軋んでいる。

* * *

「まあ、ともかく!」

文月を元気づけるように、綾乃は快活に言った。

「慰めになるかわからないけど、あんたは、正しく女史の急所を突いたの。当たりが厳しくなったのはそのせいよ」

「急所?」

「そう。女史の妨害にもかかわらず、新人としては異例の早さで契約を取った」
「ビギナーズラックってヤツだよ」

「であつてもよ。これ以上ないほどの見事な反撃だつたと思う」
綾乃は皮肉っぽく口評を歪める。

「あんたのこと舐めてたのよ、女史は。このまま潰せるとでも思つてたんじゃない？
ところが思いの外あんたは手強かった。だからこそ意地になっている。周囲が気付くくらいにね。本来あの手のタイプは自己評価を気にして、もつと陰湿で卑怯な手段を使うはずなのに」

味噌汁をずっと啜り、綾乃は続けた。

「女史は、あんたの足を引つ張りながら、自分の首を絞めているの」

それから、身を乗り出してにっこり笑い、常盤のセリフをなぞるように口にする。

「頑張れ、文月。この状況を切り抜けなきゃいけない当事者はあんただけど、あんたはひとりきりってわけじゃない。常盤さんも言っていたじゃないの。皆、わかってるって。だつたら」

綾乃は、ぴん、と指先で文月の額を弾いた。

「もつと周りを巻き込みなさいよ。女史に一对一の関係に持ち込ませなさんな」

「……うん」

文月は頷いて、へへ、と笑った。先ほどまでの追い詰められたような気分は、綾乃の冷静な分析と励ましで、何となく楽になった気がする。というのに。

「そういえば、常盤さんは営業フロアによく出入りしてるの？」
う。またその話題に戻るんですか。

「まあ、それなりに。提案書携えて、ふらりと現れるみたいなの」

そもそも営業企画課は、言葉の通り営業部と縁が深い。営業が契約した商品をより効率的に売り出すための企画を立案したり、逆にこういった商品を取り扱ってはどうかと営業に提案したりするのが仕事だ。そして営業企画課きつてのやり手と言われる常盤は、当然営業フロアの顔馴染みだ。フロアの喧騒の中を、あの捉えどころのない笑みを浮かべて優雅に横切る姿が思い浮かぶ。

「ふうん。それだけ？」

「それだけって？」

「いや、常盤さんに対して、やけに文月の腰が引けているような気がして」

そ、そうかな？ と文月は空つとほけた。

「腹に一物ありそうって言ってたのは、綾乃だよ」

「そうだけど。一般的には超人氣物件であることも、事実よ」

実際のところ、似たような雰囲気的人物を、文月は身近に知っていた。その人物にま

つわる経験から、あれは絶対見た目通りの男性ではない、と思っている。そしてまた、常盤のちよつとした表情に、言葉に、文月はそれを確信してしまうのだ。だから、できればお近付きになりたくない、というか――

そのとき、文月の物思いを遮るように、再び声が掛けられた。

「ちゃんと食ってるか、文月」

綾乃の隣にトレーを置き、どさっと腰を掛けたのは、もうひとりの同期で営業一課の原田翔だ。外回りから帰って来たのだろう。

「お疲れ」

「おう、お疲れ」

翔は早速ご飯に箸を付けながら、文月のまだ少しへこんだ様子と、食べかけのランチプレートを見比べた。朝のやり取りは、当然目にしていたはずだ。

「まずはしっかり腹ごしらえしろ。俺の先輩の受け売りだが、空腹だと思いがネガティブになるんだそうだ」

「何だそれ」

綾乃が笑う。

「腹がいっぱいになると、どうにもなりそうにないこともどうにかできそうな気がしてくるんだと。そういう気持ちになるのが大事なんだとき。俺もよく、まずは腹ごしらえ

しようか」って言われる」

ほら、俺ってナイーブだから、数字が出なくてへこんだりするだろう？ と原田はニ

ヤリと笑う。

「食え、文月」

彼のセリフに、食べかけのランチプレートを見下ろして、文月はふう、と強く息を吐く。

――今のはため息じゃない。

自分を鼓舞するためのもの。そう、常盤が言っていた通り、今までだって何でもない風を装ってこられた。これからだって、それができないはずがない。何でもないふりをしているうちに、本当に何でもなくなるときがきつと、くる。何でもないことにできる日が、きつとくるはずだ――たぶん。

再び箸を動かし始めた文月の前に、綾乃がポーチから取り出した苺キャンデーを一粒置いて微笑んだ。

「食後のキャンデーで、効果倍増」

ふふ、と文月も綾乃に微笑んで見せた。

* * *

そんなことがあった翌日のことである。

野崎をどうにか駈かけて外回りに出た文月は、いくつかの名刺を手に帰社した。門前払いも当たり前飛び込み営業では、それなりの成果だ。さて、これらはどうにかビジネスになるだろうか。そんなことを考えながらエントランスを抜け、閉まりかけたエレベーターに急ぐ。が、それに飛び乗ろうとして、文月はかろうじて踏み止まった。扉の向こうにちらりと見えた人物は――

一旦閉まった扉が、音もなく開く。うう、やっぱり。

「どうぞ」

そう言っつて、薄うすらと笑みを浮かべているのは常盤だ。スーツの上着を腕に掛け、重そうなビジネスバッグを提さげている。ということは、外回りだったのだろうけれど。何だ、この遭遇率の高さは。

「すみません」

文月はぎこちなくそう言っつて乗り込み、常盤の斜め後ろに立った。何ともいえない沈黙が、二人きりのエレベーター内に流れる。

昨日のお礼とか、言っつた方がいいよね。あれはたぶん、励ましてくれたのだし。
「……あの」

「今日は、外回りに出られたんだ」

意を決して切り出そうとしたセリフは、宙に浮いた。

「え？ ああ、はい。そうそう同じ手はくありません」

文月が真面目な顔で頷くと、微かすかに振り向いた常盤が、くす、と笑った。

「調子、出たみたいだね」

「へ？」

「佐久間さんはそうでないと」

そうでないと、とは、どうでないと？ いやいや、そうじゃなくて。

「えっと、昨日はありがとうございます。ああやって言っつていただいて、通ず意地のベクトルが間違っつていたかもしれないと冷静になれました」

「うん」

どうにかしてこの状況を抜け出そうとするあまり、この状況を作り出している野崎に囚とらわれすぎていたのかもしれない。

「頭のいい女性は好きだよ」

ちん、と鳴ってドアが開く。

「はいっ!?」
顔を引き攣らせて固まった文月に、扉を押さえた常盤が「降りないの?」と首を傾ける。

降ります、降りますともっ!
ほんつと、よくわからない男性だ。尤も、自分も些細な言葉に過剰反応しすぎなのだろうけど。

文月は慌てて常盤の横をすり抜け、エレベーターを後にした。ところが、どういうわけか常盤も一緒に降りてきて、並んで歩き出す。因みに、企画のフロアは一つ上だ。

そのすらりとした容姿と柔らかな物腰から、一部では『企画の騎士様』などともてはやされている常盤である。そんな人物と肩を並べているところを見られたら、営業部だけでは物足りずに、企画部にまで手を出したとか言われそう。

少し眉を寄せ、難しい顔をしている文月に気付いて、常盤が可笑しそうに口にした。
「そういえば佐久間さんは、男をたぶらかして営業成績を上げているんだっけ」

野崎の『媚びてるんじゃないわよ』発言からこちら、文月が男性社員に頼って営業活動をしているという噂が流れている。その発信源を考えるのもウンザリだった。綾乃の言うところの陰湿で卑怯な手段も、実は既に行使されているのだ。

例の契約にしてみても、誰かからおこぼれをもらったのではないか、そのために何か

よからぬやり取りがあったのではないか、などと、わざわざ文月の耳に入るように口にされることもある。

よからぬつて、どんなよからぬなのか、是非、直接説明していただきたい! そしてまた、あなたたちの勤める会社を支える営業は、そんなにちよい人たちなんですか! と声を大にして訴えたい。

「私なんかいたぶらかされるような男性が、本社で営業張ってられるかって思いますけど」

そうやって文月が肩を怒らせると、のほほんと常盤が言った。

「僕はたぶらかされちゃったかな。営業じゃないけど」

何ですと!?

「でも安心して。仕事に私情は挟まないから」

常盤はふつふと笑うと、ぴた、と固まった文月をその場に残し歩き続ける。

その冗談、全つ然、笑えませんかっ!

「というわけで、これから持ち込む企画、佐久間さんも一緒にやってみない?」

常盤は肩越しにそう告げると、文月の返事を待つでもなく、そのまま営業フロアへと向かった。

文法的には意向を尋ねている風だけど、あれは参加確定ということのような気がする。

——神様、これは一体何の試練でしょう。

女史だけで手いっぱいだというのに、あんな訳のわからない男性の相手まで、とか。だけど、と文月はビジネスバッグを握りなおして、再び足を踏み出す。

企画のプロジェクトに参加させてもらえるなんて、滅多にないチャンスだ。どんより落ちかけた気分を無理矢理浮上させ、文月は常盤の後を追った。

* * *

「さて。じゃあ、始めましょうか」

テーブルの向こうの常盤がにつっこ微笑んで、傍らの紙袋から何やら取り出した。

文月は営業三課の先輩社員、曾根と並んで会議室のテーブルに着いている。

その後デスクに戻ってみると、案の定、野崎から回された仕事が置かれていた。が、それらは量は多くても緊急性のないもの、ということとは周知の事実。「そんなもん後でいいから、この企画書三部コピーして会議室へ持っていけ」という都築課長のひと声で捨て置かれることになった。『そんなもん』と一蹴されるような仕事に振り回されているという事実に、文月がささくられた気分になったのは、まあ、どうでもいい話だ。

「ウチに持ち込まれたのは、これです」

「ステレンレスマグ？ いや、卓上ポットか？」

さっと眺めた曾根が眉間に皺を寄せる。今更？ という思いが口調に滲む。文月は身を乗り出して眺め、首を傾げた。

「……ソープデイスペンサーじゃありませんか？」

「その通り。佐久間さん、よくわかったね」

「輸入家具を扱うお店で、似たようなものを見たことがあります」

ステレンレスの容器は、ぱっと見確かに卓上ポットに近い安定感のある形状だが、持手はなく、もう少し小ぶりでスタイリッシュな雰囲気だ。

「佐久間さんの言う通り、液体石鹸を入れるボトルです。よく目にするのはブッシュユポンプタイプですが、これはセンサーで適量が自動的に出ます。企画書を見てもらえますか」

常盤がその仕様と特長を説明し始めた。曾根は時々質問したり確認したりしながら、それに耳を傾けている。

「現状、主な購入層は、二、三十代の独身男女。この層をもっと広げたい、という先方の意向です。そのための仕様変更等もある程度は可能とのことなので、ターゲットと、販売方法、仕様の再検討をしてみたいと思います」

ソープデイスペンサーを手を取って、曾根が、ふうむと唸る。

「ばっちり購入層に被っているが、チラとも目にしたことがないのは何故だ」

「あ、お洒落な。っていう形容詞が抜けていました、すみません」

常盤がしれつと言う。三十代前半の曾根は、女性関係に若干の難アリ、と言われつつも、自他ともに認めるやり手営業マンである。その先輩社員に対して、この言動で……。常盤という人は本当にわからない、と文月は思う。しかし当の曾根は、常盤のそんな物言いを不快には思っていないようで、苦笑して「そうかよっ！」と吠えりと、手元の品の吟味に戻っていった。

「センサーってことは、触れないで済むから衛生的なわけだな。で、ユニバーサルデザインと言えなくもない、と。病院に持ち込むか？ だが、このサイズじゃ日常使いには不足か」

「病院の規模と、誰を対象とするかによるんじゃないやありませんか？ 個人病院で、患者用のトイレだったらいけそうな気がします」

文月は隣から覗き込んだ。容量は……と曾根が企画書に書かれた仕様を確認し、素早くネットをチェックした文月が液体石鹼の詰め替え用とほぼ同じ容量ですね、と告げる。「うーん、ちよつと小さいですよ。もう少し余裕がないと、入りきらなくて余った分の扱いに困りそう。今、お徳用増量タイプとかもあるし……。業務用を考えるならばもつと大きくてもいいんですけど、置き場所の確保を考えれば、ただ大きくすれば

いいというわけにもいかないってことですかね。一般的な洗面台のシンク横のサイズとか調べないといけませんね」

文月は曾根からソープディスプレイを受け取り、細かく観察する。

「適量っていうけど、一回に出てくる量ってどれくらいなんです？ フル充填で何回分くらい出てきますかね。仕様には書いてないですけど……石鹼の粘度にもよるんじゃないか」

ぶつぶつ呟きながら気になることをメモ書きし、企画書に書かれている仕様をチェックしていく。

「キッチンにも置けますよね。食器用の洗剤にも対応できるんで……しよう、か？」

「どう、常盤クン。営業三課の期待の新人は、この間の契約をビギナーズラックだと謙遜するけど、なかなかどうして、だろ？」

「まあ、そうでなきゃ、本社配属にはならないでしょうしね」

文月は真つ赤になって口籠った。

「す、すみません……。私、夢中になっちゃうと周りが見えなくなってしまうところがあります……」

「それで？」

笑っているけれど、文月を試すような光をその目に宿して常盤が首を傾けている。

「それで、佐久間さんは、どうしたらいいと思う？」

「ちらり、と曾根を見ると、言ってごらんというように頷いた。

「あの。まずはいくつか液体石鹸（液体石鹸）の詰め替えを用意して、実際に適量がどれほどの量で、一袋で何回分になるのか実験したいです。センサーの感度も確認してみないと」

「そうだね。じゃあ、それ、やってみよう」

常盤がメモしながら頷いた。

「子供向けにはどう思う？ 例えば幼稚園とか」

曾根の問いに、文月は即答した。

「無理だと思います」

「何で？」

「あのアワアワが出るプッシュポンプタイプでも大変なことになるからです。何プッシュもして山盛りになりました。綺麗にするという目的は、簡単に遊びにシフトしちゃうんですから。自動で出るとかいったら、絶対面白がって何度も繰り返して、あつという間に空っぽ（から）だと思います」

「やけに実感籠（こも）ってないか？」

「……私のアロマハンドソープが、従姉（いとこ）の息子の被害に遭いました。シンクの中、ベル

ガモットのいい香りのする泡で山盛りでしたよ」

文月が目頭を押さえるマネをすると、それはご愁傷様（しょうじょうさま）、と曾根が笑った。

「仕様の検討は取り敢えず置いといて、まずは販路を考えようか。個人病院関係はありだね。介護施設もどうか。その他に開拓するとしたら、どこかある？」

常盤がメモを取りながら呟く。

「独身じゃないところ、ですかね？ 結婚情報誌に取り上げてもらって、新婚夫婦の新居に使ってもらおうとか」

文月がそれに答えると、曾根も続けた。

「新築マンションのモデルルームや住宅展示場に販促で置いてもらうのもいいかもしれない。購入想定層の認知度を上げるのが手っ取り早いだろう。お洒落（しゃれ）に暮らしたい、まだ子供のいない夫婦だったら、興味を持つんじゃないか？」

そのとき、トントントン、と会議室のドアが叩かれた。

「どうぞ」

常盤が声を掛けるとドアが開き、固い表情の野崎が顔を覗かせる。

「会議中失礼します。佐久間さんをちょっとお借りしていいですか？」

常盤にそう断ると、文月を視線で呼び寄せた。野崎はドアを片手で押し開いたまま文月を会議室の外に出し、自分は常盤たちに背を向ける位置に立つ。そして顔を歪めなが

らも、声を潜めて文月を詰った。

「デスクに置いてあった仕事は、片付いているの？ 企画のプロジェクトに潜り込もうだなんて、何考えてるのよ」

文月は、野崎から自分を守るように身体の前でぐつと手を組む。

……どうにかできる、そう思うのが大事。

怒りを露わにする野崎の向こうに、捉えどころのない表情を浮かべてこちらを眺めている常盤が見えた。で、どうするの？ と問いかけるような。あるいは、面白がっているかのような。

——そうだ。

どうにかするために、頑張るのだ。ただ頑張っているわけじゃあ、ない。

文月は常盤から視線を外し、野崎の目を真っ直ぐに見上げた。

「野崎さんから渡された仕事は、まだ手を付けていません。こちらのプロジェクトの参加を優先するよう、都築課長に指示されました」

声を潜めるでもなく、きっぱりとそう告げる。野崎が、びっくりと口許を震わせた。

「何ー？ 何か急ぎの案件？」

常盤がおっとりとした声で問う。表情を抑えて、野崎は会議室の方へ身体を向けた。

「いえ、そういうわけでは。ただ、私が指示しておいた仕事をまだ終えていないようで

したので、その確認です」

「特に急ぎでもない仕事の件で、わざわざ、ね」

そう言っ肩を竦めると、常盤は身を乗り出して野崎の陰になっている文月に尋ねた。

「佐久間さん、野崎さんに渡された仕事、まだ残ってるの？」

そんなの先刻承知のくせに、と思いつつ、文月は頷く。

「はい」

すると、常盤は野崎に向かってにっこりと微笑んだ。目が笑ってない——と気付いたのは文月だけではない。曾根が、あーあ、とでもいうような顔をして常盤からすつと目を逸らせた。

「野崎さん、この後の予定は？」

常盤の問い掛けに、企画のプロジェクトへの誘いかと思っただようだ。野崎がぼつと表情を輝かせる。文月を呼びつけてドアを開けたままやり取りしていたのは、もちろん文月の代わりに自分が、というつもりがあったからに違いなかった。

「特には」

「空いているってこと？」

「はい」

「じゃあ——」

常盤は邪気のない笑みを浮かべた。

「何で野崎さんがその仕事をやらないの？」

「——っえ？」

「時間があるんでしょ？ 佐久間さんは今、こっちを優先させるように言われて、ここに拘束されている。元々野崎さんが彼女に渡した仕事なら、自分でやったら？」

文月の前で、野崎の背中が強張った。

「どうする？ 何か彼女に預けていて必要な書類とかあるなら、佐久間さんを行かせるけど」

「——いいえ、大丈夫です」

「そう？ じゃあ、佐久間さんは席に戻って。さっさと進めよう」

常盤は実にあつさりとして、野崎の存在をこの場から締め出した。文月は背中に刺すような視線を感じながら席に戻る。そして「失礼しました」という声とともに、会議室のドアが些か乱暴に閉められた。

「えげつねーよ、騎士様よ」

まだ緊張感の漂う室内に、曾根の呟きが響く。常盤は「それはどうも」と、優雅に頭を傾けてみせた。たぶん、文月を助けてくれたのだらうとは、思う。でも。

——やっぱり、この男性、苦手かもしれない。

2 反撃の時間です

その後一時間ほどかけて課題を洗い出し、次回の日程を調整して会議はお開きとなった。曾根が次のアポが入っているからと慌ただしく部屋を後にすると、残された二人の間にぎこちない沈黙が漂う——と感じているのは、恐らく、文月ひとりなのだけけれど。常盤とはいえ、淡々とファイルや資料を片付けている。

——あのととき。

野崎の向こうに見えた常盤は、傍観者を気取るのだろうと思っていたのに。声を荒らげることも、いつもの柔らかな雰囲気崩すこともなく放たれたのは、実に辛辣な言葉であった。曾根をして「えげつねー」と言わしめたそれを思い起こして、文月は少し遠い目をする。野崎からまた厄介な恨みを買ってしまったのは、間違いないだろう。こっそりため息を吐いた文月に、常盤がおつとりと口を開いた。

「——自分の意思を第三者の言葉で主張したのは、なかなかよかつたと思うよ」

「——はい？」

突然言われて、文月はその意味を汲み取るのに時間がかかった。

「都築課長に指示されました」ってね」

文月が、ああ、という表情を浮かべると、常盤は続けた。

「野崎さんとは、感情的な意味でも実際のな意味でも、一対一にならない方がいいかな」

「……同じことを、栗原さんからも言われました。もつと周りを巻き込めって。でもそんなの——」

「無理？ そうかなあ？ さつきと同じやり方でいいんだよ。第三者の立場や客観的な事実を利用する」

常盤は薄らと笑みを湛えて、文月の目を覗き込んだ。

「要求されたことを、要求された以上に果たしたとしても、野崎さんは満足しないよ。彼女が望んでいるのはそういうことじゃないから。佐久間さんも、もうわかっているでしょ？ だったら、戦い方を変えないと」

「戦い方……」

「君はベクトルを真つ直ぐ野崎さんに向けていた。でも、そのベクトルが間違っていたと気付いた。そうだよね」

「……そう、ですけど」

「ただ頑張ればいってもんじゃないんだよ」

先日と同じセリフを耳にして、文月は唇を噛み締める。じゃあ、どうしろと？

「君は、君のために頑張らないと」

さらりと続けられた言葉に不意を突かれて、目を見開く。

文月は頑張っていた。頑張って、頑張って——でも、誰のために？ そんなことがわからなくなるくらいに、追い詰められてもいた。

そう、自分のために、なのだ。決して、野崎に認めてもらうため、ではなく。だから立ち塞がる野崎にはもつと賢く立ち回れ、と。常盤のセリフが今、やっと腑に落ちる。

「じゃあ、会議室の後始末よろしくね」

荷物をひよいと片手で抱えて立ち上がると、常盤は考え込む文月の頭をぼんぼん、と叩いてドアに向かった。

「……はい」

頭に手をやってうわの空で返事をした文月は、はっと我に返って立ち上がった。ガタン、と椅子が鳴る。

「あのっ！」

振り向いた常盤に、文月は、ペこり、と頭を下げた。

「ありがとうございますっ！」

常盤は「どういたしまして」とでもいうように、軽く片手をあげ、今度は温度を感じ

させる柔らかな笑みを残して去って行った。

文月は、ホワイトボードを消し、椅子を整え、パチンと電気を切り——ふう、と前髪を吹きあげる。

——そうだ。私は、私のために頑張ろう。今度こそ本格的に気分が上がってきた。資料をまとめて抱えると、文月は足取りも軽く会議室を後にした。

* * *

思わず口を出してしまった。

司の視線の先、自分を守るように身体の前で組んだ彼女の手は、微かに震えているように見えたのだ。

自分が介入することで、彼女への怒りがより強まるかもしれないとわかっていたのに、らしくもない。営業フロアを横切りながら、司は自分に対する苛立ちから小さくため息を吐く。が、視界の端にこちらを窺う野崎の姿を捉え、すっと表情を消した。

自分が、割とおっとりとした感情の起伏が少ないタイプと見られていることを、司は自覚している。だがそれは、あくまでも相手が勝手に抱く印象であって、実際の司自身がそうであるというわけではない。ややもすれば辛辣な思考を口許に浮かべる笑みで、

ともすれば容赦のないやり口を柔らかな物腰で隠しているに過ぎない。

ある程度接点のある者は、司のそういった部分をよく心得ていて、にっこり笑いながら敵を斬って捨てる様を『騎士様』と揶揄したりする——決して姫君を守る『騎士様』という意味ではなく。

先ほどの曽根のセリフも、その辺りを踏まえてのものだったのだが……

今回に限っては、と司は思う。少しばかり自分におけるニュアンスが違う。

本来の騎士の役目を果たしたくなった、と言ったら、曽根は笑うだろうか。

とはいえ、彼女は自分で戦う女性だ。決して守られるばかりではない。震えながらも、あんな風に愚直に対峙しようとする覚悟を見ればわかるように。

——だが。

会議室で最後に目にした佐久間文月の、何かを吹っ切ったような笑みを思い浮かべる。最近めっきり目にしなくなったが——そう、彼女はああでなければ。

野崎の視線を背中に感じながら、司は口許を緩めた。

* * *

企画会議でのやり取りの後、野崎との間は微妙な緊張感を孕みながらも何事もなく過

ぎていた。表面上は何も変わらぬままだ。自分の仕事とともに、野崎から回される共通業務を文月は黙々とこなす。

そんなある日の夕刻。パソコンに向かう文月のデスクの上に、クリアファイルがひとつ放り出された。

「明日の一時までにこれ、プレゼン用に仕上げてください」

そして今までと同様に、文月の返事待つことなく野崎はひとつ向こうの席に戻って行く。まるで、当然のように。クリアファイルの中身にさっと目を通した文月は、それを持つ手にぐっと力を入れた。

——君は、君のために頑張らないと。

常盤の言葉が、甦る。今までであれば、何も言わずに引き受けた。だけど。

「野崎さん。これは、お引き受けできません」

文月は立ち上がり、クリアファイルを差し出した。野崎は振り返って目を細める。

「——できない？」

そう言うのと、カツカツとヒールの音を響かせて、文月の目の前に立った。

夕刻のざわめくフロアであるが、周囲の耳目が集まっているのがわかる。綾乃のアドバイスは確か、巻き込め、だったか。

「はい」

文月は、はつきりと答えた。

「何故だか聞いても？」

「明日の午前中はアポが入っていますし、その準備で今は手一杯です。それに」

そして、客観的な事実で主張する。

「これは、野崎さんの個人的なプレゼン用資料です」

それを丸投げすることは、決して当然のことではない。他の営業は誰ひとりとして、文月にそんなことを求めはしない。しかし、野崎は肩を竦めた。

「私は忙しいの。今日持ち帰った案件を調べないといけないし、明日のアポの準備もある。時間がある人が手伝ってくれてもいいでしょう？」

「ですから……」

文月も暇なわけではない、と続けようとする言葉を、野崎は無遠慮に遮った。

「会社にとって、あなたの仕事よりも私の仕事の方が重要なよ。契約成立の金額が違うんだから」

「金額の多寡を言えばそうかもしれません。それでもこれは、私にとって重要な仕事なんです」

「わからない人ね。こっちを優先しろって言ってるのよ」

咳払いとともに、低い声が割って入った。

「いい加減にしろ、野崎。佐久間は、君の都合のいい部下でも秘書でもない」

思いの外大きな声でのやり取りになっていったことに、野崎は今更ながら気付いたようだ。都築課長の声に顔を赤らめて口をつぐんだ。

「佐久間は営業として独り立ちしている。ひと月前に彼女をそうさせたのは、君だろうか？ 都合のいい使い方がいつまでもできると思うな」

「都合のいいなんて、そんなことは」

「だったら、自分の仕事は自分でやることだ。佐久間の労力を当てにするな」

「——でも、須藤さんは原田君に仕事を依頼してます」

同じチューターとしての立場だった一課の営業を引き合いに出し、野崎は引こうとしない。腕を組み、椅子の背に身体を預けていた都築は失笑した。

「それを君が言うのか？ 須藤はOJTの一環として、原田と一緒にその仕事をしているんだらう？」

「だったら、佐久間さんも」

文月の手にあるクリアファイルを指さして、都築は尋ねた。

「君はチューターとして、それに佐久間を関わらせているのか？」

「——いいえ」

「実務を通して、計画的、継続的に指導するのがOJTだ。何か教えようという意図が

あつての仕事の割り振りなら構わない。だが、独り立ちした営業に、個人的な仕事を押し付けるなんてことが許されると思うな」

野崎は都築の叱責に顔を強張こわばらせる。

「今後、佐久間に仕事を振るときには俺を通せ」

更なる念押しに「了解しました」と低い声で呟くと、野崎は文月の手からクリアファイルをすつと抜き取り、席へと戻って行った。

「佐久間も、さっさと自分の仕事に戻れ」

都築の声に、慌てて「はい」と答えると、文月は椅子にすんと腰を下ろす。小さく細い息が思わず漏れた。まだ心臓はバクバクいつている。これで野崎に関する全てが解決するとは思わない。それでも、今までと同じことが繰り返されることはもうないはずだ。

ふと視線を感じて顔を上げると、フロアの向こうに佇たずみ、こちらを眺める常盤の姿が目に入った。

鼓動が一拍、跳ねる。もしかしなくても、見られていたのだろうか。

ここからでは、どんな表情を浮かべているのかわからないけれど——本当に神出鬼没しんしゅつな人だ。

ピリピリとした空気を周囲にまき散らしつつ残業していた野崎だが、午後七時になると「お先に」と言い捨てて帰って行った。

「おーい、ちょっと待った！ 忙しいんじゃないの？ いやそれとも、仕事か速いってこと？」

文月は「お疲れ様です」と口にしながらも、パソコンに向かって密かに突っ込んだ。「この時間で終わるなら、最初から自分でやれって話だよなあ？」

向かいの席の曾根が、書類から顔を上げずに呟く。文月はちらりと視線を上げた。

「……ええと、私は返事を期待されているんでしょか」

「いやいや、この周辺に漂う皆さんの思いを代弁したひとり言。ったく、無駄にピリピリした空気まき散らしやがって、てな」

それから曾根はぐんと伸びをすると、文月に向かってニヤリと笑った。

「さっさと終わらせて、皆で飯でも食いに行くか」

急に空腹を意識して、文月のお腹がぐう、と鳴った。

「いい返事だな」

くっくつ、と笑いながら曾根は手元の時計を確認する。

「どれくらいで終わる？」

「……三十分くらい、でしょうか」

「よし、三十分後出発！」

* * *

——そして、このメンツが謎だ。

「俺のとっておきの店に案内してやるう」という曾根に付いてきてみれば。路地裏の、赤提灯が揺れる店の前に立っていた。引き戸の隙間から漏れる白煙に、常盤が参ったな、と髪をかき上げる。

「曾根さん、勘弁してくださいよ。丸ごと一式クリーニングコースじゃないですか」

張り出したオレンジ色のテントには「ホルモン みやび」と書かれている。ホルモンなのに、みやび……。何とも言えないネーミングセンスに、文月の口許が、ひくり、と震えた。曾根は一番近くにいた原田の肩をバシッと叩き、身体を寄せる。

「そんなせせこましいことを言うヤツはここに残して、俺が男の付き合いを教えてやるう」

引き戸を開けると、店内は白く霞んでいた。「四人！」と手で示して、曾根がずかずか入っていく。いや私、一応女なんですけど、と一瞬怯んだ文月の背を、「まあ、仕方がないか」と常盤が押す。

座敷に上がると、目の前のテーブルに炭の入った七輪しちりんが置かれた。換気扇は既にフル稼働だが、どうやらその役目を果たせていないようだ。

まずはビールを人数分頼むと、曾根が勝手知ったるといふ様子で適当に注文を出した。あつという間にキムチのお通しが置かれ、ビールが運ばれてくる。

「お疲れ」とジョッキが打ち合わされた。しかしそれに口を付ける間もなく、「はい、お待ち！」の威勢のいい声とともに、アルミの皿がテーブルに並んだ。

文月は思わず身を乗り出して、その白っぽかったりピンクだったりする肉を凝視する。

——何の、どこの部位か、謎だ。

「ホルモンは初めてか？」

向かいに座った曾根が笑いながら尋ねてきた。文月は皿の上の得体の知れない肉から、じつと目を離さないまま答える。

「もつ鍋くらいはありますけど、こんな生々しいのは初めてです」

すると突然、前方から伸びてきた手に、髪をぐしゃぐしゃとかきまぜられた。

「ふえっ？」

何事!? と頭に手をやるうとしたとき、横から伸びてきた別の手が文月の肩を強く後ろに引く。

「おあっ？」

文月は両手で頭を押さえた格好で、勢いのまま後ろにこてっと倒れた。

——何が起きたのか、謎だ。

一瞬の沈黙の後、その場は笑いの渦うずに包まれた。曾根も笑いながら、白い肉を網にのせ始める。

「いやあ、悪い悪い。つつい、ね。お前、実家でお袋が可愛がつてるトイプードルにそっくりなんだよ。その、モノに対する興味の示し方といい、ちよつとした仕草といい、サイズ感といい、毛の質感といい……」

何気に失礼なことを言われている、とムツとしてみると、先ほど肩を引いた手が今度は文月が起き上がるのを助けてくれた。

「ごめんね。ちよつと力加減を間違えちゃった。でも、簡単にオジサンに触らせちゃダメだからね」

常盤が薄く笑みを浮かべたまま口にする。

ええと、アナタだつて私の頭、結構遠慮なく撫でてるじゃないですか。オジサンじゃないかもだけど。

「危ない人だからねー、簡単に懐なつかいたりしちゃいけないよ」

懐なつかくつて何？ やっぱりトイプードルなの？ トイプー扱あつかいなの？ 文月の眉間みげんに皺しわが寄る。

立ち読みサンプル はここまで